

關係學研究

第 1 卷第 1 号

1972(昭和 47)年度 pp1-2

刊行によせて

刊行によせて

松村康平

日本關係学会

刊行によせて

松 村 康 平

(お茶の水女子大学)

「関係学研究」の刊行。

この日のことをいつの日に期待できたであろう。

関係弁証法(関係学)が発展し、さらに発展の期待できるこの日のことを、共に学び研究を続けている人たちと「いま・ここで・新しく」喜び合いたい。

「関係学研究」を推進する研究の成果(関係弁証法の理論・技法・実践)は、人間科学としての児童学、児童臨床活動ほか、教育・看護・医療・矯正・産業などの広汎な諸領域に及んでいる。そのなかから、ここでは、お茶の水女子大学家政学部大学院研究科児童学専攻の修士論文にみられるものをあげよう。

<昭和48年> (1973年)

- | | |
|-------|------------------------------------|
| 鈴木芙美子 | かかわり方の科学に関する研究—人間科学の基礎としての関係弁証法理論— |
| 永山由紀 | 臨床実践論序説—関係弁証法の展開— |
| 信田さよ子 | 科学的認識の成立発展過程—媒介の諸形態— |

<昭和47年>

- | | |
|-------|--------------------|
| 根間恵美子 | 人間論試論—関係弁証法と唯物弁証法— |
|-------|--------------------|

<昭和46年>

- | | |
|-------|-------------------------|
| 大井晴美 | 関係構造論序説 |
| 赤井美智子 | 関係発展論序説—領域間関係の関係弁証法的発展— |

<昭和45年>

- | | |
|------|-------------|
| 黒田淳子 | 人格変容に関する一考察 |
|------|-------------|

<昭和44年>

- | | |
|------|-----------------------------------|
| 大梶優子 | Personality Changeの研究—臨床行為法による接近— |
| 畠中徳子 | 家族関係の発達的研究 |

<昭和43年>

- | | |
|-------|------------------------------|
| 飽田典子 | 自己について |
| 谷口佑子 | 集団活動の研究—その研究法とリーダーシップに関する考察— |
| 岩村佳代子 | 役割関係の研究—相談における関係弁証法の展開— |
| 清水幸子 | 認識と行為の関係—行為の可能性について— |

<昭和42年>

- | | |
|------|-----------|
| 三宅啓子 | 人格に関する一考察 |
|------|-----------|

<昭和41年>

- | | |
|------|-------------|
| 岩本邦子 | 認識の成立に関する研究 |
| 高津安子 | 相談関係に関する研究 |

並木紀子	集団技法に関する研究
<昭和40年>	
大戸美也子	史的関係論序説
栗井 淳	児童臨床研究における自発性の問題
黒田淑子	児童臨床の関係弁証法—関係弁証法の立場とその教育相談における展開—

これらの研究は、お茶の水女子大学「児童臨床研究室」を中心に進められたものであっても、そのほかの研究室や施設、これの研究に直接・間接に協力してくださっている方がたに多くを負っている。ここに謝意をのべる。

この数年来とくに児童学関係諸研究室との相互協力が進展して、たとえば「言語障害研究室」での優れた成果（田口恒夫教授指導）は関係学研究の発展に著しく寄与している。関係学の発展を志向する研究者・実践者との協力・連担の範囲が更にひろがっていくことを、願ってやまない。

「学際」とか、「人間関係」「国際間関係」とか、また、理論研究と応用活動の緊密な連けいなどが論ぜられるとき、そこには「関係の理論」「関係学」が不可欠である。これにもこたえることのできる研究誌となっていくように、努力を続けていきたい。

(1973年4月20日記す)